

語り手としての Chaucer's Parson の意味

田 卷 敦 子
池 上 忠 弘

はじめに

チヨースアーの『カンタベリ物語』⁽¹⁾は、語り手チヨースアーを含めて三十人の人物が登場し、それぞれが独自の「話」をする構成になっている(この点からみれば、二十四篇の話しか残っていないので、未完であるが)。誰がどのような話をするか、十四世紀後半のイングランドにおいて登場人物の社会的階級、職業等を反映していて興味深い。

私たちは前稿「チヨースアー」⁽²⁾「教区司祭の話」⁽³⁾にみる異端審問手引書の影響(一)、「同(二)」⁽³⁾において、そのひとつ「教

区司祭の話」に、異端審問の際に活用された複数の手引書の影響を明らかにしてみた。しかしながら新たな疑問が浮上してくる。

チヨースアーはなぜ教区司祭 parson に、審問や告解に用いられた「贖罪規定書」や悪徳の矯正に用いられた手引書の内容を語らせたのだろうか？

宗教改革(一五三五)のとき、イングランドの村落と町の教区には、四万六千の中世の教会があったとされる。これに修道院付教会、大聖堂 cathedral、礼拝堂 chapel、chantry など千余が加わった⁽⁴⁾。これらの聖務に従事する相当数の司祭たち priests がいたであろう。このうち教区司

祭のことを、英国々教会の周辺では rector と表現される
 ことが多い。そしてチヨースアーの時代には parson と表現
 される司祭がいた。また教区に住んで俗人または宗教団体
 に帰属し、そこから俸給を受ける vicar も教区司祭と呼ば
 れることがあった。中世において聖職者は読み書きができ
 る希少な人びとであり、本来のつとめのほかに国王や領主
 の管理運営に関する文書処理にもたずさわった。したがっ
 て礼拝堂付司祭 chaplains は普通、何人かの書記 clerks を
 助手にかかえていた。彼らも priest と混同されることがあ
 った。チヨースアーはこのような中から parson を選んで、
 『カンタベリ物語』の最後に登場させたのである。「総序歌」
 において parson は、教区民とともにある聖職者として理
 想化された人物に描かれている。

なぜ parish priest でも rector でもなく、parson の物語
 なのか？ 語り手を parson にしたのはなぜなのだろう
 か？

これについてチヨースアーの意図をさぐってみようと思
 う。そこでアングロ・サクソン教会時代の教区司祭(六六
 三—一〇六六)、ノルマン征服後の教区司祭(一〇六六—三
 四八)、チヨースアーの時代の教区司祭(一三四八—一四〇〇)

に分けて考察してみよう。

本論に入る前に、parson、という言葉の意味を一応詮
 索しておこう。

parson、について最も早い時期の記録は、*Oxford Eng-
 lish Dictionary* (1. a, b), *Middle English Dictionary* によれば
 一一五〇年ごろである。

(a) c 1250 *Lutet Soth Serm.* 51 in *O. E. Misc.* 188 *pes per-
 sones* ich wene ne beop heo no 5t for-bore. (*O. E. D.*)

次にトマス・マ・ベケットにかかわる著述にみられる。

(b) c 1290 *Becket*

561 in *S. Eng. Leg.* I. 122 *Person, preost, opur 3wat-so
 he beo. Ibid.* 176/2425 *Of priores and of persones: and
 manie opur clerkes al-so.* (*O. E. D.*)

『聖タンスタン伝』の著述にもある。

(c) c 1300 *Sleg. Dunstan* (Ld) 95: *Ech person schoilde
 chose To writen him chaste from lecherie, opur his
 churche leose.* (*M. E. D.*)

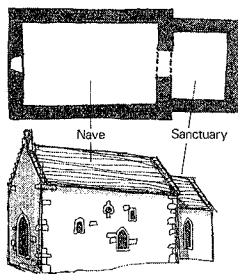
(d) [1314-15 *Rolls of Parli.* I. 313/1 *Au Priour de Laun-
 seton, Parsonne de la dite ville.*] (*O. E. D.*)

(e) c 1325 *Poem Times Edu.* II 55 in *Pol. Songs* (Camden)

- 326 Some so a parson is ded and in eorthe i-don, Than-ne shal the patron have 3lives anon. (O. E. D.)
- (f) a 1325 (c 1280) *Sleg. Pass.* 342: A bisschop clupep to godes bord moyne.. And makep ham persouns [vr. persones] & prestres. (M. E. D.)
- (g) c 1330 (? a 1300) *Arth. & M.* 1104: It was pe per-sone of her toun, Hap ypleyd wiþ pi dame and biȝat pe al a-game. (M. E. D.)
- (h) c 1330 (? c 1300) *Amis* 616: Arrow prest oper per-soun.. pat prechest me pus here? (M. E. D.)
- (i) 「Rector のように、教区の全十分の一税を得た人たちを示す parson という語は、一六四五年まで聖職者の一覧表に使われている。」これは一九〇一年 Sprout *Bk. Com. Order* Introd. 49 note. にある (O. E. D.)。
- (j) 「grey (grey-coated) parson すなわち教会財産を個人財産として所有する俗人、または教区の十分の一税を所有している農夫。」(O. E. D.)
- (k) rector すなわち parson、または十分の一税を教会財産にし、個人財産として所有しない教区の聖職祿所有者。(O. E. D.)

“parson” は、文献上、十三世紀中頃から現われる、ラテン語の *parochus* (教区司祭) にさかのぼる古期フランス語系のことと推定される。また “parish priest” も O・E・D によれば、一三〇〇年頃の *Cursor Mundi* 26173 (Coll.) が初出である。

一章 アンゲロ・サクソン教会時代の 教区司祭(六六三—一〇六六)



Christianity came to Britain in Roman times. The earliest churches consisted of a nave (where the congregation worshipped) and the sanctuary which contained the altar. Occasionally the sanctuary was rounded at the east end. 6)

—
では教区司祭はいつ頃からいたのだろうか、その起源を明らかにしてみよう。

ブリテン島へのキリスト教の伝道は五九七年、教皇グレゴリウス一世がイタリア人アウグスチヌスを団長とする一行をサクソン王国の一つ、ケントに派遣したときに始まる。ちょうど同じ頃、ケルト教会による伝道も開始され、二方面から伝道が行われた。ケルト教会とローマ教会の間に慣習の違いからくる対立があったが、ホイットビー会議(六三三―四)において、ローマの慣習を採用することにより一応の解決をみた。カンタベリ大司教に任命されたテオドルスは、六六九年五月にカンタベリに到着した。彼は二十一年余ここにいた。その間イギリス全島を旅行して廻り、生活の正しい規則と復活祭奉行の正しい教会法による基準を広めた。ベエダが、「English」が最も幸せな日々を送った」と称する時代がテオドルスによってもたらされたのである。

アングロ・サクソン人は、ローマ人の遺した都市文明のすべてを拒絶して使わなかった。彼らは人里離れた大きな「集落」に定住し、開放耕地という村落農業によって土地を耕した。集落は個々に小さな教会を所有した。アングロ・サクソンのセイン thegn (local landlord, 地方の有力者) は一族と使用人たちのために私的な教会と司祭を所有して

いたのである。

個人の私有財産である教会、「領主」の「家臣」である司祭という概念が六〇〇年ごろから一世紀あまり、ほとんどいたる処で見られた。教会は個人であれ、組合であれ、修道院であれ、司教であれ、国王であれ、誰でも所有することができた。教会は不動産のように扱われ、売買したり、相続されたりした。小さな修道院の格が落ちて王国の役人、あるいはセインとその家族の屋敷になったりした。そのまた逆のケースもあった。

テオドルスは全島をくまなく *episcopatum* に区分し、さらに細分化して教区教会と教区司祭とを置いた。イングランドを各々収入を保障された司祭と礼拝堂をもつ教会区に限なく区画するという教会区制度創設の推進者は、司教とセイン層であった。セインが所有していた私的な教会を土地・建物ごと寄進し、これが教区教会の私的財産となったのである。

初め教区司祭はしばしばセインの館付の私的司祭 *private chaplain* だったが、時の経つうちにその後継者が教区の司祭となった。教会の土地・建物を贈ったセインの相続人たちは、当然教区司祭を指名する権利を主張したが、実

際は司教が司祭の上司である⁽¹⁰⁾。セインは彼ら自身、しばしば彼らの教区民の十分の一税と聖職禄を相続する執事法 *deacons' order* を採用した。すなわち聖職者推薦権、または聖職禄の授与権は中世を通して領主によって続けられた役割であった。

教区教会の財政上の基盤は、年収の十分の一税、または教区の土地の産出物の十分の一の教会への寄進である。教会の初期の教えにより、その四分の一は司教に、四分の一は司祭の生計に、四分の一は貧しい人びとに、そして残りの四分の一は修理費等に分けられた。後にそれは *rector* か、または十分の一税の管理者が受容する伝統になった。

八五〇年ごろからデイン人が繰返し襲ってくるようになる。略奪をこととするデイン人の軍勢が九世紀後半にイングラランドにすすわったことは、イングラランドの教会のはなはだしい衰退を招き、ただ司祭と民衆だけでやっと生きているという状態になってしまった。アングロ・デイン時代において王直属のセインは農民に対して領主になる。農民たちは隷属的な条件の下で、領主の自家農場において決めた日数の労働を提供する義務を負っていた。

このときアングロ・サクソン人である教区司祭は農民出

身で、彼自身フリーホールダー（自由保有農民）である。領主に対する労働の義務はないが、自分の耕地を持ち、自身で耕地をたがやす。職務上、賦役を免除されていたが、農民と同じ身分であった。教区司祭 *parson* は十五世紀になっても、G・M・トレヴェリヤンによって次のように描写される。「教区司祭が、さすがは生まれは農民だけにあって、みづから教会領耕地（通常四十ないし六十エーカーの開放耕地）を本格的に耕作し、さらにほかの土地まで貸借りして、その時間の大半を農民として過ごす場合も見受けられた。」⁽¹²⁾

『カンタベリ物語』『総序歌』に、Parson の兄弟 *Plowman* が登場する。

With hym ther was a Plowman, was his brother,

That hadde ylad of dong ful many a fother: (I. 530)

中世を通じて教区司祭 *parson* は伝統的に生まれが農民であり、いつも教区の農民とともにある聖職者であった。

二

またテオドルスはブリテン島に告解の習慣をもたらし

アイルランドのケルト教会の私的告解の慣わしは、類似した償いの査定表「贖罪規定書」*libri poenitentiales* の作成をもつて大陸に広まりつゝあつたが、大司教テオドルスによつてアングロ・サクソン教会においても受け容れられた。テオドルスはローマから派遣されてきたけれども、ローマ教会方式の公開的告解はとらなかつた。ペーダ、エグベルト、アルクインなどもすべて私的告解 *private confession* の弁護者であつた。

教区において告解は教区司祭が執り行つた。とくにあてはめねばならぬ「罰」ないしは「制裁」の種類・程度を査定する場合の便覧としてテオドルスの「贖罪規定書」が書かれた。¹³ 通称、*「テオドルスの裁き」* と呼ばれる。

テオドルスの深い学問、知恵と経験はカンタベリ大司教の頭と肩を国内の誰よりも上位に置いた。そして彼の会議はしばしば、とくに悔い改め *penance* の分野に求められた。悔い改め *penance* は教会との間に和解を求める罪びとの上に課されるものであつた。テオドルスの裁きの収集は、変化に富んだ問題の多量さでもつて、「贖罪規定書 *Poenitentiales*」として知られた。多くは、粗野な罪 *grosser sins—drunkenness, fornication, theft, homicide* であり、

他に教会の規律の違反に関して、または異端におちいる墮落に關して、道徳と結婚との質問、とがあつた。

古いケルト教会の習慣を基本としたテオドルスの裁きは何処にでも受け入れられた。*Poenitentiales* は次の言葉で始まる。

「もしだれか司教でも聖職者でも習慣的な酔っぱらいならば、彼をやめさせるかまたは免職にすべきである。もし修道士が飲酒によつて病氣になつたならば、彼に三十日の悔い改め *penance* をさせよ」。重要なものは、テオドルスの裁きが求めた題目の順に並べられた。多くは結婚の習慣に關するものだつた。¹⁴

三

デイン人との戦いの後、教会は荒廢し、テムズ川の南部にはラテン語の知識のある者や教会の機能を英語で理解できる司祭が一人もいなくなつた時期がある。アルフレッド大王（八四九—九〇二）が、ラテン語で書かれた書物をアングロ・サクソン語に翻訳するといふ大偉業にとりかかつたのはそうした理由による。¹⁵

アルフレッド大王の翻訳書と著書、その他を挙げてみよ

う。

(a) 聖グレゴリウスの『司牧者の心得』

司牧者や教師の養育・訓練用としてラテン語で *Pars foralis*、英語で *Herdebooc* (*Shepherd's book*)。中世の宗教会議では、この本の使用を課す場合もあった。

(b) オロシウスの『異教徒を駁する歴史』

四一〇年のゴート人、ゲルマン人、ノルウェイ人、ドイツ人、アングル族のブリテン島侵入などの歴史を広く一般大衆に訴えた。

(c) ベーダの『英国民教会史』

聖グレゴリウス一世によりブリタニアに布教し、初代カンタベリ司教にアウグスチヌスを派遣。ケント王、ノーサンブリア王のキリスト教改宗にはじまるアングロ・サクソン教会史。

(d) ボエティウスの『哲学の慰め』

中世でいちばん愛読された書物のひとつとされる。死をまえにしたボエティウスと『哲学』との対話形式をとり、ここで『哲学』はその弟子を励まし、戒め、静かに神の永遠の正義に想いを致らせる。

(e) 聖グレゴリウスの『対話集』¹⁶

教皇グレゴリウスとその弟子で司祭のペトロとの対話形式になっており、聖人の生涯や奇跡を詳述している。

中世にすこぶる人気があった。しかしなにより中世の贖罪の原理に多大な影響を与えた。告解や悔悛の秘跡にグレゴリウスの遺志が反映され続けたことになる。

(f) 『アングロ・サクソン年代記』

(g) 『アルフレッド王法典』

(h) 『アルフレッドの法令集』

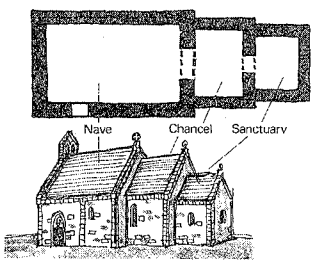
これらの著述がすべてアングロ・サクソン語で書かれたことに留意したい。

ローマ教会が教父たちの著作を教会の古典とし、ローマの教会史を所有したのに対し、アングロ・サクソン教会は教皇グレゴリウス一世の神学や、ノーサンブリア人の同胞ベーダの『英国民教会史』などを、アングロ・サクソン人の教会史として所有したのである。

彼らはベーダや教皇グレゴリウス一世などを教会のすぐれた指導者として尊敬した。これらの神学者、指導者を通して自分たちの教会の由来を初代教会にまでさかのぼらせ、直接カトリック教会の正統と任じたのである。

こうしてアングロ・サクソン教会、または 'English Church' の意識が確立された。この後、中世を通してローマ教会の支配下におかれた 'English Church'、それを不当とする不屈の精神がヘンリー八世の宗教改革まで流れることになる。⁽¹⁷⁾ Anglican Church, Church of England, High Church, High Anglicanism, Anglo Catholicism, ⁽¹⁸⁾これらは、いずれもアングロ・サクソン教会(時代)の正統な後継者と任じている点で、ほぼ同義語であった。

二章 ノルマン征服下の parson (一〇六六一—三四八)



The chancel lies between the sanctuary and the nave. Often it contains the choir stalls and is on a slightly higher level than the nave. 19)

—

アングロ・サクソン王国は百五十万人の人口を有していたが、一〇六六年にノルマンディのウィリアムによって征服され、掠奪され、恒久的に制圧されてしまった。諸州で家屋の打ち壊し、焼き打ちが行われた。住民は殺害され、逃亡したりしたが、多くのものは奴隷として身を売られたのである。

そしてイングランドは征服者たちの間に分割された。大貴族所領や諸修道院はノルマン人によって支配され、完全に封建化された。ノルマン征服後のイングランドの最低の単位は、集落が転化した領主の *manor* であつた。

フランス人の諸侯 *baron* や騎士 *knights* がサクソン人の *gentry* やセインを追い出した。また外来の主としてイタリア人の聖職者が、司教職と修道院長職と司教座大聖堂参事会の土着のアングロ・サクソン人にとつてかわつた。

ウイリアム征服王の秘書官と裁判官と役人の大部分が聖職者であつた。学識ある俗人が全く存在しなかつたからである。裁判官や役人たちは聖職禄を報酬に与えられたばかりでなく、司教職さえ与えられた。

そしてアングロ・サクソン人の教区司祭も被征服民の聖職者にされた。征服民の間に分配された教会の富は、彼には関わりのないものであつた。マナーにおける教区司祭の地位は農奴 *villain* のそれと類似したものである。

アングロ・デイン時代における半自由農民階級は、ノルマン征服によつて「農奴身分」になつた。農奴は出生と相続によつて土地に束縛された。農奴と彼の家族は所領が人手に移つた時には、いっしょに売り渡された。自由に移

動したり、賦役を取り消すことはできない。領主直営地で、報酬を受けることなしに、年間多くの日々を労働しなければならなかつた。

教区司祭は、*virgate* か *half-hide* か *hide* の保有地を、特殊業務のため賦役は免除されて保有した。集落の農奴たちの同業者として扱われた。アングロ・サクソン人の教区司祭が、農奴とともに領主の直領地に住んで農地を耕やしていた様子は、ドゥームズデイ・ブック *Doomsday Book* の記録に詳しい。

二

ノルマン征服後、ウイリアムはイングランドの全体の四分の一の土地を教会に与えた。それ以外の土地と教区教会からアングロ・サクソン人の教区司祭は追い出されたことになる。そして教区には外来の、主としてイタリア人の教区司祭が配置された。そして教区の聖職禄と十分の一税の新たな受取人となつた彼らはラテン語を語り、ジェントリ―たちはフランス語を話した。

こうしてベータとアルフレッド大王のことばであるアングロ・サクソン語が、広間や寢室から、さらに宮廷や修道

院から駆逐されて、農民たちのたわごと、すなわち無知な農奴たちのことばとして軽蔑された。アングロ・サクソン語は書かれる言語であることをやめ、教養のない人びとの口端で急速に生活の必要と便宜に適用するようになった。⁽²⁴⁾ チョーサーの時代までの三世紀間、農民たちの言語になったのである。このようなわけでイングリランドの農村では領主と農奴との距離は、言語という障壁によって高められていた。 *ballifs, men-at-arms*, その他の領主と農奴との間に介在して両者を結びつけたのは司祭 *parish priest* であった。彼は身分は高くないがフランス語と英語とラテン語で話しており、ラテン語が公式文書の用語である。

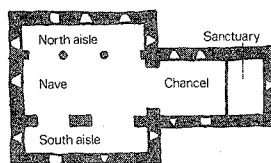
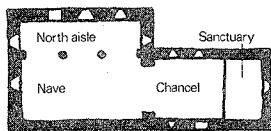
外来の、主としてイタリア人の教区司祭は教区に対するすべての事柄に、司教の権威によって縛りつけられた。しかし教会法の難しい手続きを経て、彼の居住地から動くことができた。⁽²⁵⁾

一方、教区にはアングロ・サクソン人の教区司祭も居住していた。前記したようにアングロ・サクソン人の教区司祭は、執事法 *deacon's order* で教区の執事 *deacon* に縛られ、その上の司教にも拘束されていた。そして農奴と同様に土地に縛られており、勝手に居住地から動くことはでき

なかった。一応、どちらも教区司祭 *parish priest* であるから、両者を区別する呼称が生じたのではなからうか。

いつの頃からかアングロ・サクソン人の教区司祭は *parson* と呼ばれ、イタリア人の教区司祭は *rector* と呼ばれるようになったと思われる。 *Oxford English Dictionary* によれば、*parson* も *rector* もほぼ同時期に現われ、同義語で使われているのである。教区の十分の一税は *rector* が受けとり、教区司祭として存在した。しかし *parson* も教区に隷属していたわけであるから両者は共存した。次第に教区民にとっては誰が *parson* で誰が *rector* であるか区別はつかず、教区司祭 *parish priest* を意味する二語は混同して使われたであろう。

三章 チョーサーの時代の parson (一三四八—
一四〇〇)



Aisles were added by widening the nave. They were useful for processions as well as providing extra accommodation. The north aisle is usually older than the south aisle because the south side of the church was used for burial. (26)

一三四八年に黒死病がイングランド全土を襲ったとき、前章で明らかにしたところの、parson と rector の違いが歴然とする事態が発生するのである。それは死の床にある伝染病患者に対する両者の対応の違いに表われた。中世の人びとは、地上での生活は、永遠の生活と比べればそれほど重要ではないと信じていた。そこで死に関連した宗教儀式はすべていいねいに行った。死の床にある人に

は、司祭の手で最後の儀式がとり行われた。司祭に向って生きていた時におかした罪をすべて告白しなければ、地獄におとされると信じられていた。最後の告白は非常に重要であった。

死者は体を屍衣でくるみ、教会まで列をなして運ばれていく。葬式のあと、彼は自分の経済力で得られるかぎりの大きな墓に埋葬された。

しかし黒死病がやった時期は、キリスト教の葬式をとりに行うのは困難だった。あまりにも多くの人間が死んだので、死者の埋葬はほとんど不可能な状態で、死体は通りや野原にただ放っておかれた。死体がくさったまま何日も通りに置き去りにされ、死肉をあさる動物がうろつくままにさせていた。人びとはその有様をみて、最後の告解をせず死ぬとこのような目にあうと悟っておびえた。それはほとんど恐怖に近いものであった。

しかし黒死病が流行したとき、近くに司祭はいなかった。逃げだしたか死んだかのどちらかである。イングランドでは司祭の数がとても足りそうもないと知ったバーストウエルズの司教が、だれでもが死の床にある人の最後の告

白を聴きとどけられると宣告したという。

黒死病が去ったあと、多くの司祭が信徒を見捨てて伝染病から逃げだしたとして非難されることになる。なにしろ聖職者の半数が死んだのだから逃げ出すのはひきょうなことだった。人びとは教会に裏切られたと感じていた。

しかし、居住地から動くことができたのは rector その他の司祭たちである。前述したように、parson は農奴と同様、勝手に居住地から動くことはできなかった。parson は教区に留まり、教区民とともにいて、共に死んだ。

サマーセット州 Brympton D'Evercy にある聖アンドルウ教会には、黒死病流行の間、献身的につくした一人の parish priest をしのぶ記念碑がある。⁽²⁷⁾

グロスター州 Ampney にある聖メアリ教会には、一三四年の黒死病流行の時、教会と共同体とを切り離すよう助言された。村は全滅し、教会だけが残った。⁽²⁸⁾

また教区教会の助任司祭 vicars のリストに、かの恐るべき疫病の年に死んだ二人の聖職禄所有者の名が記載されている。⁽²⁹⁾

二

黒死病の流行によってイングランドは人口の三分の一以上を失ったが、とくに農村部において被害が大きかった。教区司祭たちは貧しくなった教区を捨てて、収入のよい働き口を求めてロンドンや都市周辺に移り住んだ。

司祭たちは裕福な教区や、より高い報酬だけにしか目を向けないといわれるようになる。チョーサーにおいても、「総序歌」五〇七—一二三行に手厳しく批判している。

教区の、俗人が寄進した聖職禄は、その大部分が全然正規の聖職についていない人びとや、あるいは全くの俗人に与えられていた。

また教区教会が、修道院や富裕な不在兼領者の所有物になっていて、そこに実際つとめる者は、身許不明の、ラテン語のわからない、薄給の無知な「ミサ僧」であることが多かった。

教区司祭の職にある者が rector であることはなかったし、また vicar (教区の収入または宗教団体に帰属し、彼らから俸給を受ける教区司祭) さえ置かれず、チャブレンか教区書記 clerk が、聖職禄所有者のかえりみないつとめを薄給で代行している場合が非常に多かった。⁽³⁰⁾

空白になった教区を生き残った parson がうめることに

なる。彼らは彼の教会にいてミサをあげ、日曜には村人の大半がそれに参会した。

事實、田舎の教区は貧しかった。十分の一税は会衆の年収の十分の一かまたは農産物によって支払われた。悪い時期であったから、また土地所有者の修道院やバトロンたちが穀物、ヘイ、木材、果物など十分の一税を私物化したから教区自体は貧しかった。⁽³¹⁾

人手不足は高い賃銀の要求となり、物価の上昇にもつなされた。そのことは教区司祭たちにも打撃を与えた。彼ら自身の考えでは千五百ポンドの地域であったが、年に四ポンドより多く受けとった教区司祭はいなかった。⁽³²⁾

この頃から教区司祭の記述には、「poor parson」と形容詞が付くようになる。⁽³³⁾

「a poure person of a town」

ウィリアム・ラングランドは、poor parson が貧しくなった教区から脱出したいが、許可なしに移動できない様子を描いている。

「parson と parish priest は司教に向かつて、黒死病の流行以来自分の教区が貧しいことを申し立て、ロンドン居住

の許可をもらいたがるが、」(Piers Plouman B. Prologue 83)

ここでも教区を捨てて移り住むことができたのは rector の方であり、parson にはその自由がなかった。poor parson たちは、彼らのつましい司祭館 cottage-rectories の中で、彼らのものとして与えられているような小作農 peasants の群に忠告と慰めを与え、基金でもって旅人には避難所を、病人と貧者には施しを与えた。parson のわずかな俸給または十分の一税に加えて、金銭かその他の自由意志による信仰深い寄進があった。また教区所属の農地が、parson の日々の糧のために生産し、食糧を貯蔵して parson に必要なものを供給した。⁽³⁴⁾ こうして parson はかろうじて生活し、教区民とともにあった。

三

parson が農民出身であり、農奴制の束縛に苦しんでいた階層である以上、一三八年の農民一揆に無関心な筈はない。その自由をねがう心情に共感をいだくことが多かった。

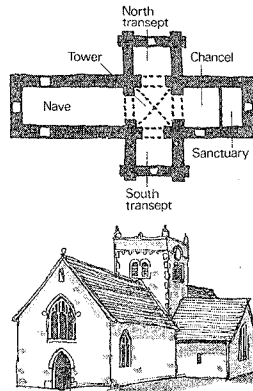
教区の十分の一税をとり上げて教区聖職者を飢えさせる

ものは、富裕な修道院であれ、高位の聖職者であれ、あるいはまた俗人であれ、すべて教区司祭とその教区民にとって憎悪的となっていた。

イングランドの東南部の修道院はとくに評判が悪く、農民一揆の参加者の暴力行為によってひどい被害をこうむった。一三八一年六月、エセックス州とケント州に地域的一揆が起こり、それが二十八州をくだらぬ全国的反乱の口火となった。民衆の指導者たちに混じって、教区司祭にひきいられた蜂起もあった。聖職者自体も、多くの者が教会批判者であった。十分の一税を富裕な修道僧や外国の高位聖職者にとられてしまう教区司祭の少なからぬものは改革論者であり、反逆者でもあった。

Parsonは何世紀の間、修道士や托鉢修道士を競争相手と見なしてきた。彼らはParsonから十分の一税や手数料をとりあげ、先を争って彼らの告解や秘蹟の執行の邪魔をした。そうした面でも、フランシスコ托鉢修道会、ドミニコ托鉢修道会を憎悪するウイクリフ派の改革者たちと結びついたのである。

結び 語り手としての Chaucer's Parson の意味



Some churches have their towers between the sanctuary and the nave. On either side of the tower lie the transepts. They make the plan of the church look like a cross.

35)

『イギリス教会史』で著名なJ・R・H・ムアマンは、十四世紀のことを“troubled times”と表記した。⁽³⁶⁾ 災難が気まぐれに次々とおそいかかる時代、人間が飢饉、家畜の伝染病、黒死病、傭兵隊、反乱、異端派の主張といったこととがらにふり回された時代であった。とくに黒死病によって人びとは深い絶望感にうちひしがれた。それからというもの、人びとは死と絶望に取りつかれてしまう。伝染病に

よる精神的苦痛は、およそ耐えがたいものだった。一日のうち自分の腕の中で息子や娘が死んでゆき、家族全員を失う者もあった。一つの村が石造りの教区教会だけを遺して、そっくり地上から消えたりした。

人びとの反応はさまざまであった。男たちが気がふれたようにそこら中を歩き回っていた。貧しい人びとが怠けるようになり、働くのを嫌がるようになった。だらしない生活をしていたほうが生きのびられる、と決めつける人びとがいた。彼らは一日中、酒場から酒場へと飲み歩いては浮かれ騒いでいた。虚無感から働く意欲をなくし、ぶらぶらと〈怠惰〉にくらす。死の恐怖を忘れようとして酒におぼれる。賃銀を得ようとはせずに、食物その他を盗んでくらす様子は、『農夫ピアズの幻想』にも描写されている⁽³⁷⁾。

チヨーサーも〈勤労〉は〈祈りの行為〉とする修道会規則に従っている筈の修道士に、「なんで聖アウグスチヌスが命じているように、両手を使って働いたり、労働したりする必要があるんでしょうか⁽³⁸⁾」と言わせる。無気力、怠惰、働かない人間、この現象は当時の社会問題になっていたらしい。

また、中世人は宴会を開いたり、肉料理を楽しむことが

好きだったが、黒死病のあととはとくにその傾向が強まった。金持ちたちは、楽しめるあいだに思いきり人生を楽しんでおこうと考えたのだ。死の不安、地獄への恐怖から逃れようとして飲み食いにもふける、過食症現象がみられた。金持ちたちも日夜酒におぼれ、狂気のように騒いで恐怖心をまぎらわせていたのである。

一三九九年にイングランドのリチャード二世が客をもてなした規模をあげてみよう。「クリスマスのあいだ、十二日間にわたって毎日、彼の料理人は二十八頭の牛と三百頭の羊、それに無数のニワトリを殺し、一人人にのぼる客の食事を用意した⁽³⁹⁾」。こうした規模の宴会がいたるところで繰り広げられた。「総序歌」にも愉楽の生活が習慣となった地方地主 *Frankelyn* が登場する。「彼の家には食べものにも飲みもの、ありとあらゆるご馳走があふれかえった。彼は季節ごとにメニューをかえて客にふるまう。」(「総序歌」三三—三四五) 生きているうちにこのように客に施しておけば、少しは地獄から救ってもらえるかもしれない、そんな死生観もあった。

黒死病が与えたショックは、社会現象としてもみられた。むしろ苦行者の運動がヨーロッパ全域に広まってい

った。

「死の舞踏」(tanse machre)と呼ばれる行列劇が、ヨーロッパ各地に広まったのもそのせいである。

教皇クレメンス六世が一三五〇年に聖年を宣言すると、何百万人という巡礼たちがローマに赴き、生き残ったことを祝った。呼応して各地で巡礼ブームが起ったのである。

チヨースアの時代の人びとは、救いを求めて東へ西へ、南へ北へと路上をさまよい歩いてた。

三好洋子氏は、「一三二八一年以前の時点において、ecclesiasticism (反僧侶主義)の意識は、国王から一般民衆にいたるまで共通に所有していたもとも根本的な社会意識の一つであった」と指摘している。そして「anticlericalismからの救済」世直し的手段としてかれら(注・ラングランドとチヨースアのこと)はきびしい道德的自己規律を課した。それは七つの大罪、つまり傲慢・憤怒・邪淫・嫉妬・怠惰・貪慾・貪食の大罪を犯してはならないという自己規律であった⁽⁴⁰⁾という。

anticlericalism はチヨースアにおいても、もちろん例外ではなかった。しかしチヨースアには、当時のローマ教会

の支配体制を根こそぎ変革しようとするウィクリフのような激しさはなかったし、またラングランドのように聖職者を厳しく弾劾する姿勢もとっていない。チヨースアの関心は、あくまでも十四世紀後半の English の心の問題であつたと思われる。

二

これまで概観したように、十四世紀後半のイングランドには、黒死病の流行による精神的な後遺症で人びとの心は病み、その結果として諸悪がはびこるといふ現象がおきていた。これを導く救い、世直しの理念は、チヨースアにとつては何であつたか。

十四世紀後半、チヨースアの時代のイングランドには、独自の国家としての姿を現わしはじめるのが認められる。England (国家)、English Church (教会)、English (国民)、English (国語)——これらについて、さかのほればアングロ・サクソン教会は、教皇グレゴリウス一世の神学やベーダの『英国教会史』を、アングロ・サクソン人、英国人の教会史として所有していた。国家の成立は『アングロ・サクソン年代記』に記されてあつたし、『アルフレッド王

法典』と『アルフレッドの法令集』に法律が定められてあつた。全島の集落には教区教会が置かれ、そこにはアングロ・サクソン人の教区司祭がいる。彼は生れが農民で、教区民とともに開放耕地を耕やす plowman であつた。教区民は教区司祭にむかつて罪を告白し、悔い改め penance をし、「裁き」を受ける。

「聖職者とか司祭が集落へやつてきたとき、あらゆる者がその權威の言葉を聴こうとして集つてくるのが、当時の人々の慣習となつていた。彼らは説かれることを喜んで聴いた。そして聴き、知り得たことを實際行動に移した。生と死における村民の最も貴い結びつきは、教区教会を中心とするものであつた。」

チヨースーの救いの構想は、ベータが「English が最も幸せな日々を送つた」と称するこの時代に求められたと思われる。

まず最初に考えられることは、ローマ教会の支配体制やローマ教皇に直属の修道院や托鉢修道院ではない、テオドルスが全島くまなく教会区に区画したときのように、English の教区教会を、人びとの信仰生活の中心に置くことであつた。

二番目に考えられることは、外国人の聖職者でないこと。England の教区で生れ、English を話す、いつも教区民とともにある聖職者、すなわち Parson であること。これが rector でも priest でもなく parson が選ばれた理由であらう。

三番目は、アングロ・サクソン教会時代にラテン語の読めない聖職者たちのために翻訳の俸業をなし遂げたアルフレッド大王のように、十四世紀後半のラテン語の書物は読めず、English しか読めない人びとのために、英語で Parson's Tale を書くことであつた。

三

では十四世紀後半の享楽主義と悪徳が蔓延する社会から救済の世直し的手段として、何が考えられたのだろうか。

チヨースーは、当時一般に行われていた巡礼の慣習を借りて、カンタベリ巡礼という場を設定し、当時のあらゆる階層の人びとを登場させ、それぞれにふさわしい話を語らせる。しかし巡礼の慣習はウィクリフなど真の信仰を求め人びとからは批判されていた。キリストの聖地や国内の聖所を巡礼することによって罪障消滅を得ようとする慣習

は、異教時代の多神教に由来するものであり、真の信仰によるものではないと、ウィクリフは指摘している⁽⁴²⁾。

ラングランドもウィクリフ同様に、「ベツレヘム、バビロニア、アレクサンドリアなどの聖地を巡礼してきた者は真の信仰を知らない」と書いている⁽⁴³⁾。そして「聖ヤコブやローマの諸聖人の巡礼地を訪れるあなたたちは、まず（聖なる真理）を探し求めなければなりません⁽⁴⁴⁾」といい、一定の場所にとどまり土地を耕せ、と命じている。

本稿では一章から三章まで、教区司祭 Parson の身分と生活と信条をみてきた。村の貧しい Parson が路銀と馬を調達して巡礼に参加できたかどうか疑問であり、彼の兄弟 Plowman についても同様である。「彼はまずみずから働いてよき行いをなし、ついでそれを教えるという、この気高い例を彼の羊たちに示し⁽⁴⁵⁾」、「彼は家にとどまって、狼が害を与えることのないように羊たちによく気を配っていたのである⁽⁴⁶⁾」。たとえ三・五〜四日間の日程であったとしても Parson が教区と教区民を放置して巡礼に参加したとは思えない。

この他にも『カンタベリ物語』の巡礼の中には、巡礼に参加する筈のない人が含まれている。当時の女子修道院の

規則では、修道女の巡礼を禁止していた。当然、女子修道院長も参加できなかったであろう。

この物語が架空の話として、チヨーサーは実際に巡礼に出かける筈のない人物をも登場させているわけで、Parson についても、それと知りながら最後の「語り手」として配置している。そして「一番ためになる話」をさせる。伝統的な贖罪規定書の形式でもって、「七つの罪源（悪徳）」とその矯正法⁽⁴⁷⁾について語らせるのであった。

このことについても、やはりアングロ・サクソン教会時代の「テオドルスの裁き」と私的告解の習慣が念頭にあったものと思われる。しかしチヨーサーは、アングロ・サクソン教会時代のものを直接そのままの形で引用してはいない。

チヨーサーは国際的な宮廷にとつぷりとつかっていたので、中世フランス文化やイタリアの事情にも詳しかった。チヨーサーには、経験と深い教養に裏打ちされた広い視野と国際性が備わっていた。イタリアのボッカカチオ（三二二―三三七五）の作品、『デカメロン』のことも知っていたであろう。それと同じように悪徳の矯正法も広い範囲から選ばれたものと思われる。

教会の教義や倫理に関する教えから逸脱した者（＝異端）を教化・帰順させる方法——、それは十三世紀からフランスを中心にイタリア、スペインなどに多量に出まわっていた。

一九〇一年にK・ピーターセン Kate Petersen が、「教区司祭の話」八〇—三八六行と九五八—一〇八〇行間はドミニコ会修道士 St. Raymund of Pennafort の *Summa de poenitentia* or *Summa casuum poenitentiae* (一二三二—二九年) から引用し、三九〇—九五五行間、すなわち七つの罪源とその矯正法の部分は、ドミニコ会托鉢修道士 Guilielmus Perardus (or Peyraut) の *Summa vitiorum* (一二三六年) からの引用であると発表した⁽⁴⁷⁾。そして一九七一年に、ラテン語版の「七つの罪源のための矯正法」の出典を、ウエンツェル S. Wenzel⁽⁴⁸⁾ が発見するのである。

ペラルドスの *Summa virtutum* から書き直された *Postquam* と呼ぶ写本⁽⁴⁸⁾、*Summa vitiorum* から書き直された *Quoniam* と *Primo* と呼ぶ写本の二つの改訂版を、ウエンツェルは同一のものであるとし、さらには異なった出典、すなわちいくつかの他の引用された部分に似たものを提示し

ていること等によって、多数の写本の存在を明らかにした。チョーサーは、享楽主義と悪徳が蔓延する社会から救済（＝世直し）の手段をこれらの著作中に見出し、教区司祭 parson にそれを語らせたのであろう。

注

- (1) チョーサーのテキストは L. D. Benson ed., *The Riverside Chaucer*, 3rd ed., based on *The Works of Geoffrey Chaucer*, ed. F. N. Robinson (Boston: Houghton Mifflin, 1987) を使用。
Helen Cooper, *The Canterbury Tales*, Oxford Guides to Chaucer (Oxford: Clarendon Press, 1989), pp. 395-409 および Derek Pearsall, *The Canterbury Tales* (London, 1985) を参照。翻訳ではチョーサー、榊井迪夫訳、『カンタベリー物語』、全三巻、岩波文庫、岩波書店、一九九五年、を参照した。
- (2) 田巻敦子・池上忠弘、「チョーサー「教区司祭の話」にみる異端審問手引書の影響」(一)、『成城文芸 一五二号』、一九九五年。
- (3) 田巻敦子・池上忠弘、「チョーサー「教区司祭の話」にみる異端審問手引書の影響」(二)、『成城文芸 一五三号』、一九九六年。

- (4) Derry Brabbs, *English Country Churches*, London, 1985, p. 9.
- (5) 六三三年のホイットビー会議以降ノルマンに征服される以前までを、アングロ・サクソン教会時代としている。 (L. J. Rogier, R. Aubert, M. D. Knowles, eds., *The Christian Centuries, A New History of the Catholic Church*, vol. 2, *The Middle Ages*, London, 1969.)
- (6) Henry Puckroze, *Seen in Britain*, London, 1977, p. 111.
- (7) ベーダ、『イギリス教会史』、長友栄三郎訳、創文社、一九六四年、二六四頁。(Charles Plummer, ed., *Venerabilis Bedae Opera Historica*, (Oxford University Press, 1956.)
- (8) 上智大学中世思想研究所編訳、『中世キリスト教の成立』、講談社、昭和五十六年、六九頁。英語版原書は注(5)。
- (9) Joan Thirsk, ed., *Land, Church, and People*, 1970, pp. 39-44.
- (10) G. M. Trevelyan, *History of England*, London, 1947, pp. 64-5.
- (11) J. Charles Cox, *The Parish Church of England*, London, 1954, pp. 2-3.
- (12) G. M. Trevelyan, *op. cit.*, p. 56.
- (13) 上智大学中世思想研究所編訳、『中世キリスト教の成立』、前出、二四四―四五頁。
- (14) J. R. H. Moorman, *A History of The Church in England*, London, 1976, pp. 24-5.
- (15) B・A・リーズ、高橋博訳、『アルフレッド大王』、開文社出版、昭和六〇年、二六一頁。
- (16) 翻訳はアルフレッド大王の命を受け、ウスターの司教ウエルフェスが行ったと、アッサーが述べている。アッサー(小田卓爾訳)、『アルフレッド大王伝』中公文庫、一九九五年参照。
- (17) Anglican Church イギリス教会、またはイギリス国教会 Church of England は、十六世紀の宗教改革によってローマの支配から脱し、国王を教会の首長とする国民教会となったのであるが、国教会自身は、その成立を大陸の宗教改革と同一視されることを好まない。その由来を初代キリスト教、とくにアングロ・サクソン教会時代の伝統に立返って、アングリカン・チャーチの教理を打ち立てた。
- (18) アングリカニズムが確立されるのは、エリザベス一世治下(一五八―一六〇三)である。英国々教徒はベーダや教皇グレゴリウス一世などの中世教会の神学者、指導者たちを、宗教改革の中心人物であったヘンリー八世やクランマーと同列に、教会の長い伝統における指導者として尊敬

た。

- (19) Henry Pluckrose, *op. cit.*, p. 111.
- (20) P. Vinogradoff, *English Society in the Eleventh Century*, 1908, p. 455.
- (21) G. M. Trevelyan, *op. cit.*, p. 131.
- (22) ウィリアム一世は王国からどれくらいの税収入があるのかを調べるため、一〇八五年に土地調査を行った。土地の価値、人口、面積、栽培状態、所有者、借用期間を記録させ、トウームズデイ・ブックにまとめられた。
- (23) Derry Brabbs, *op. cit.*, p. 69.
- (24) G. M. Trevelyan, *op. cit.*, pp. 127-8.
- (25) J. Charles Cox, *op. cit.*, p. 4.
- (26) Henry Pluckrose, *op. cit.*, p. 112.
- (27) Derry Brabbs, *op. cit.*, p. 1.
- (28) J. R. H. Moorman, *op. cit.*, p. 112.
- (29) G. M. Trevelyan, *op. cit.*, p. 228.
- (30) G・M・トレヴェリアン、藤原浩・松浦高嶺訳、『イギリス社会史』、『みすず書房』一九七一年、四〇頁。
- (31) J. Charles Cox, *op. cit.*, p. 12.
- (32) J. R. H. Moorman, *op. cit.*, p. 117.
- (33) Chaucer, *The General Prologue to the Canterbury Tales*, ed., 121.
- (34) Phyllis Hodgson, *The Athlone Press*, 1969, Notes 478, p. 121.
- (35) J. Charles Cox, *op. cit.*, p. 12.
- (36) Henry Pluckrose, *op. cit.*, p. 112.
- (37) J. R. H. Moorman, *op. cit.*, p. 115.
- (38) W・ラングランド作、池上忠弘訳、『農夫・ヒアズの幻想』、中公文庫、一九九三年、二〇一―一頁。
- (39) チョーサー、梶井迪夫訳、『カンタベリー物語 上』、岩波文庫、岩波書店、一九九五年、二二頁。
- (40) 『暗黒の中世』、ジョン・D・クレア構成、アンドレア・ホプキンス監修、同朋舎出版、一九九四年、五一頁。
- (41) 三好洋子、『14世紀後半のイングランドにおける社会意識』、『歴史研究』第三四五号、一九七〇年、二五頁。
- (42) ベータ『イギリス教会史』(長友訳) 創文社、一九六四年、一四六―七頁。
- (43) G. M. Trevelyan, *England in the Age of Wycliffe*, 1899, London, pp. 178-9.
- (44) William Langland, *Vision of William concerning Piers the Plowman*, B. Text, ed. W. W. Skeat, VI 523-43.
- (45) *Ibid.*
- (46) *General Prologue I (A)* 496-7.

(46) *General Prologue* I(A) 512-3.

(47) K. O. Petersen, *The Sources of the Parson's Tale* (Radcliffe

College Monographs 12 ; Boston 1901). ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㆅ

ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㆅ ' Guilielmus Perardus, *Summa virtutum ac*

vitiorum II (Lyons 1668) ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㆅ°

(48) S. Wenzel, ed., *The Summa Virtutum de Remedii Anime*,

(Athens, University of Georgia Press, 1984).

(49) S. Wenzel, 'The Source of Chaucer's Seven Deadly Sins,'

Traditio 30 (1978) 352-353.